

●春日部市民文化講座（第47回） 「渴きをいやす茶の湯」

◆日時：2026年6月24日(水) 10時（ぼぼら春日部4階会議室）～12時

■渴きをいやす茶の湯

私は今朝もお濃茶を練り、お薄を点てていただきました。ぼくにとって茶の湯は趣味を超えて、呼吸と同じです。そうして考えていくと、ぼくにとって茶の湯とは死ぬまでの「修行」なのですね。この2年の間に4回も死にかけて、今でも身体の中に病気がありながらも、毎朝感謝してお濃茶を練り、薄茶を点てて少しばかりのお菓子と一緒にいただくのは、生きることの「修行」だと思います。

■自分の欠けたところを知る

ぼくは高校2年生の時に母を亡くし、2年前に妻がいなくなって、心の渴きってこういうことなのかと大切なものを失って思うようになりました。上手く話せないのですが、欠けること、今まで満たされていたことが無くなっていくこと、健康もそうです。そういうことを深く味わい知ることが「渴き」だと思うのです。肉体的な「渴き」でなくて、いろいろな意味での「渴き」なのです。皆さんが結婚されたのも、女性は男性に渴いていたからであり、男性は女性に渴いていたからなのです。これを「数寄（すき）」と認めたのが千利休です。誤魔化しなく「自分の欠けたところを知る」ところから、利休の茶というものが生まれたのではないかと思います。これが今日の講演の骨子になっています。

■今は誤魔化しの社会

「渴き」の反対は満ち足りることでしょう。でもね、今の商業主義的な報道や、快楽的なものを善しとする皆さんの行動は、誤魔化しですよ。若者たちや高齢者の人たちに快楽を与えるだけの商業が成り立っているのは、享乐的営業、みんな楽しく生きようよというような時代であり、それが今なのです。世の中の多くは、それになんの疑問も持たないのです。そうしたことにお金を使うことが惜しいとも思わないのです。そういうものにお金を払うことが好きだからなのです。それは、本当は皆さんが「渴いている」からではないのでしょうか。どうしたらよいか分からないのですよ。みんながお茶を飲めばいいのですよね、茶の湯をやれば、ああそうかと分かるはずですよ。皆さんは「嘘ではない本当」に生きていますか。「渴き」を知っている人ですか。自分の欠けていることをちゃんと知って、今日ここに来ましたか。

■千利休の時代は渴きを知る人たちであった

千利休の時代というのは、戦国時代ですから日本中のどこかで戦いがあり、生きるか死ぬかの戦いをやっていたのです。そういうことを考えると、戦いに出た夫が亡くなると、奥さんは未亡人になり、子どもは父無し子になってしまうでしょう、農民の人たちは搾取されて貧しくなってしまうという厳しい時代でした。そんな中でも、戦争によって潤う人たちもいたのです。それは武器を造ったり、売ったりする人たちですね。

渴きをいやす茶の湯 [レジュメより]

序

1. 千利休の時代は渴きを知る人たちであった
2. 戦国時代のまん中で千利休の侘茶は誕生した
3. 堺の商人や武士たちは、生と死の狭間にあった
4. 徳川家康によって江戸文化が誕生する
茶の湯の変化が生じてきた

I. 戦国時代に形成された茶の湯

1. 千利休の渴き —— 商人の損得
2. 堺の商人の渴き —— 博多商人との競争
3. 日本列島の渴き —— 貧しさと孤独

II. 千利休の茶の湯のもてなし

1. 点前と道具の工夫
 - 1) 侘び茶の象徴
 - (1) 赤茶碗、黒茶碗 長次郎に焼かせる
長次郎の茶碗は土器に近い器であった
 - (2) 渴きを象徴する道具
不十分さを表現していた
 - 2) 茶人は仕える心、もてなしの修道をしている

III. 茶の湯の修道

1. 定期的稽古によって侘び茶を修道していた
2. 日常生活で侘び茶を修道していた
 - 1) 人との出会いと、もてなし
 - 2) 自分自身をもてなす
自分を愛するように隣人を愛する
3. 千利休の死と高山右近の死が共通していること
 - 1) 「死ぬことと向かい合う」
 - 2) 委ねることを知る
自分の大切なものを握りしめていない



◆写真上：
高山右近の日本訣別の書状
1614年



◆写真下：
千利休の遺偈

千利休の時代、戦国時代というのは、勝つグループと負けるグループがあるのですが、武器商人たちが潤っていたのです。そんな中で、国の中心にいたのが、室町幕府の足利将軍家であり、次に織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と続いていくのですが、そういう為政者の中で茶の湯は流行っていったのです。

■戦国時代のまん中で千利休の侘び茶は誕生した

それは何故かという、世の中の人々がみんな「渴いていた」からなのです。千利休は、日本中が、特に京都の人たちがみんな「渴いているなあ」と思ったのではないのでしょうかねえ。そして、彼は商人でした。商人である証が、表千家に織田信長から千利休に鉄砲の玉を送ってくれたことに対する手紙が残っています。表千家はそれをちゃんと管理しています。千利休は商人だったのです。損得勘定で生きていた人なのです。それが私たちの知っている茶人・千利休になっちゃったのです。

■千利休の渴き

皆さんは、お茶をやってから自分は変わったと思いますか。どうですか……。ぼくは変わりました。ぼくが変わったのは日本が好きになったということです。特に春夏秋冬に対して非常に喜んで生きているのです。だから、これから梅雨が本格化しますが、梅雨らしい日々が続いても、ぼくは好きです。庭に出るとカタツムリが出てくるじゃないですか。いいですね。茶の湯を習い楽しんできて、ぼく自身は、本当に変わったと思います。千利休という人は、大阪堺の商人でしたが、それほど大きな商人ではありませんでした。干し魚などを扱っていた人ですから、南蛮貿易などで栄えていたような堺の大商人たちとは格差がありました。それは彼のコンプレックスであったと思います。だって金のある人たちの金遣いとギリギリのところで生活している人たちとの金遣いでは大きく違いますからね。しかも、それが喜べなかつたら惨めじゃないですか。いつかは彼らを乗り越えてやろうという意地が千利休にはあったと思いますよ。ですから、千利休の中には堺の商人としての「渴き」があったのです。競争社会、格差社会で生じることに對して、コンチクショウという不公平さに対する「渴き」があったのだと思います。

■堺の商人の渴き

そんな堺の商人たちにも「渴き」がありました。それは秀吉の時代になってなのですが、秀吉が天下人となり晩年、朝鮮半島から中国を目指して出兵した文禄・慶長の役(1592-93、1597-98年)の頃でした。その戦の最前線基地が博多になりました。そのため、博多に各地からの大名、武士たちが集まり、博多の商人たちが脚光を浴びるようになり、利休のお茶を始めたのですよ。そうしたら、堺の商人たちは適わなくなっちゃったのです、堺が衰退していったのです。商売では堺よりも博多が力を持つ中で、利休の茶の湯は、博多の商人だけでなく、全国の人たちの間に浸透していったのです。

■日本列島の渴き —— 貧しさと孤独

千利休の茶の湯が誕生した頃、孤独を知っている人たちが多かったのです。家族が居ながら、仲間が居ながらも独りぼっちだったのです。部下が居ながらも「孤独」だったのです。部下が居る人というのは、上に行けば行くほど孤独になりますね。皆さんは、お父さんやお母さんをやってきて、今、「孤独」を感じませんか。子どもたちが巣立ってしまい、私のところには孫さえも連れて来てくれない、今までの苦勞って何だったのだろうか……。と思いませんか。そういう方が多いと思いますよ。そして、歳をとると自分で創り上げてきた、掃除をして整えてきた家や部屋にも住めないで、施設にポイと預けられてしまう。その方が子どもたちにとって楽ですからね。これって「孤独」でしょう。実は、千利休の時代にも起こっていたのです。戦によって未亡人ができ、父無し子ができ、一人で生きていくにも競争社会でしょう。誰が自分の本当の味方だかも分からないという時代でした。

■あなたには親友がいますか？

皆さんに凄く質問をしたくなりました。「あなたには親友がいますか？」あなたには自分の気持ちを素直に話すことのできる人はいますか？ いる人はいいですね。いない人は孤独で不幸せですね。そういう人はお茶を一所懸命にやることです。お茶は「渴き」をいやす。千利休は、それを実践したのですから、間違いないのです。ぼくも 50 年以上お茶をやっていて間違いないです。今朝もお濃茶を練りいただき、お薄を点でいただき、お菓子は普通のカステラでしたけれども幸せだなあ……。と思える心情がぼくの中に育っているのですよ。一服のお茶に「ああ、幸せだなあ」と思えるのですよ。それが戦国時代に形成された「利休の茶の湯」です。その「利休の茶の湯」をみんなに流行らせるか、喜んでいただけるかというのが「おもてなし」です。その「おもてなし」が今日まで繋がってきたのかという、彼の一番の革命的な発見である道具があります。

■千利休の茶の湯のおもてなし 道具

戦国時代に形成された「利休の茶の湯」「利休の侘び茶」が、何故現代までに繋がってきたのかという、彼の一番の革命的な発見の道具があったからだだと思います。

千利休の侘び茶が広がる前まで、茶杓は金とか銀とか、象牙とか鼈甲とか、中国から伝来してきた道具が価値のある物として使われていたのです。足利時代は特に名物と呼ばれて珍重されていました。それを千利休は「止めた」と言って、竹を切ってきて茶杓を削って使い始めたのです。ですから今、皆さんが使っている茶杓はほとんどが竹でしょう。ですから、千利休は道具を革命的に変えてしまったのです。その竹の茶杓に相応しい茶碗は何かというと、楽茶碗です。

あの楽茶碗に金の茶杓を載せても映えないですよ。だって、あんなに土っぽい茶碗はないじゃないですか。あれは泥で造ったものですよ。磁器ではなく、粘土を焼いて造ったものです。千利休は長次郎という人に粘土で最初に赤の茶碗を焼かせたのですよ。最初の赤は、それほど綺麗な茶碗ではなかったと思いますよ。その次に黒の茶碗を焼かせたのです。最初に生まれたのが赤茶碗です。この千利休の道具の開発というのは、日本文化に強烈な影響力を与えました。そして、千利休は商人として人を見抜く才覚があったのだと思います。長次郎という人に出会って、この人に自分好みの茶碗を焼かせようと思ったのですからね。それが、今の楽家の先祖ですからね。でも、その長次郎という人がどのような人であったのかということは分かっていないのです。瓦職人であったと言われていますが、どこで千利休と出会ったのかも分かっていないのです。長次郎の茶碗は土器に非常に近い器です。そういう土器のような茶碗を千利休は善しとしたのです。では、この世の中で、土器に近いものは何でしょうか。それはぼく自身であり、あなた自身なのですね。だって、ぼくらは土くれの中から造られたのでしょ、と聖書に書いてあります。人間は土から造られたから、土に還るのです。何の不思議もないですよ。

■ 「渴き」をいやす道具

千利休と長次郎の力によって、この土器が生まれたことによって、中国渡来の天目茶碗なんかよりもみんなが「いいなあ…」と言うようになってしまったのですから、日本民族って不思議ですね。それが「渴き」をいやす道具として流行っていったのです。長次郎の赤茶碗や黒茶碗のようにカセた茶碗の方が、天目茶碗なんかよりも、人々の「渴き」をいやす道具として流行っていったのです。そのポイントは何かというと「不確かさ」であり、「不十分さ」なのです。だって長次郎の茶碗なんて、触ったらポロっていきように軽く柔らかい物なのです。ですから、皆さんが楽茶碗を使う時は、あまり粗相に扱ったりするような人には扱わせないほうがいいですね。その人が持った瞬間に割れるかもしれないですよ。表千家に伝わっている長次郎の茶碗を直接接触することができる場面に3回ほど遭遇したことがあるのです。そこに宗匠が居られたので「これで一服飲みたいなあ」と言ったら、「私も飲んだことがないんですよ」って言われてしまいました。それくらい大事にされていて、もろくて儂い、「渴き」をいやす最高の道具として使われるようになったのです。不思議ですねえ……。

■ 茶人は仕える心、もてなしを修道している

皆さんは自分の身体を大切にしていますか。何を食べて、何を飲まない、いつ寝て、いつ起きる、満ち足りる生活のために、自分には何が欠けているのだろうか、ということについての敏感な精神的、肉体的な反応をお感じになっておられないだろうか……って、牧師は思ってしまう訳です。それで説教が生まれる訳ですよ。

自分の欠けたることを知ることが侘びなのです。侘びの本質は、欠けているということを嫌っていうほど知らされるということです。自分が病んでいること、弱いところをいっぱい持っているなあ……ということを知ること、欠けていることを知ること、「渴き」を知ることであり、本当の求道、生きるために何をしたらいいか、何をしたらいけないかという智慧をいただくのです。それはどうということかと言うと、自分を大切にすることであり、自分自身に仕えるということです。自分自身を大切に人が、初めて妻や子や孫を、周りの人たちや会社の人たちなど多くの人たちを、キリスト者用語でいうと「祈れるようになる」、その人の幸福を祈ることができるようになる、仕える心ができるのです。ですから、千利休の時代、戦国時代の中で、利休の中で誕生した生々しい心とは「仕える心」であり、どうしたら隣人に喜んでいただけるのだろうかとか「もてなす心」、これが茶の湯の始まりです。そして、自分のあるがままの心で一服のお茶を点てることを善しとしたのが、「利休の茶の湯、侘び茶」なのです。儂いものを大切に、それを維持していくというのは凄いい修行です。だから、自分自身との毎日の日常生活の中での修行が大切です。この修行がなければ、欠けている私は維持されないのです。

■ 江戸文化の誕生と茶の湯の変化

茶の湯の修行というのは、子育てに近いものかもしれませんね。赤ちゃんは弱いからこそ、守っていくことが大切にしてあげようという心遣いを、千利休は自分が発明した道具に対して思いを寄せたからこそ、今日まで、その道具が遺っているのだと思います。しかし、今の茶の湯は「利休の茶の湯」と違います。どこが違うかと言うと、徳川家康が江戸文化を創造し、3代にわたって確立していくのですが、京都の文化を全部そっくり江戸へ持ってこようとしたのですが、18世紀中頃になると、「利休の茶の湯」と違ったものがいっぱい出てきたということなのです。

道具屋が商人と結託して十職と呼ばれる千家御用達の道具屋を作ってしまったのです。それが現代のダメ茶の湯になってしまっているのです。ダメ茶の湯というのは、千利休の侘び茶からどんどん離れていくことなのです。千利休から離れていくというのは、道具を見せびらかし、道具を褒めるような茶の湯なのです。ぼくは、茶の湯で一番大切なもの、お茶会で最も大切にしなければいけないのは、そこにお越しになっているお客様だと思います。道具ではないんですよ。それをあたかも見てくださっているお客様以上に道具に思いを込めてしまっていたら、もう利休の茶ではないのです。だって本来はお客様のためにおもてなししているのですからね。

■茶の湯の修道 定期的なお稽古による修道

ぼくたちが茶の湯を習うということは、修行というか修道というか、道を歩み続けることなのです。途中で辞めないことなのです。それは何かというと、定期的なお稽古を勝手に休まないということなのです。何故勝手に休むかというと、自分のスケジュールを最優先にしているからなのです。茶の湯のお稽古は3番目、4番目ということなのです。そういう人が何人来ても、「利休の茶の湯」は学べません。教えられて分かることではなくて、教えられて気付くことが侘び茶の「侘び」という世界なのです。自分で気付かなかっただけで、学んでいないことと一緒にです。

■日常生活で侘び茶を修道する

「利休の侘び茶」は、日常生活の中で修道、修行するのです。私は毎日、感謝して自分自身をもてなしてきました。自分自身をもてなす心があれば、突然来られた方にも「一服どうぞ」と差し上げられるのです。

■千利休の死と高山右近の死が共通していること

レジュメの最後に千利休の「遺偈」と高山右近の「日本訣別の書状」を写真で載せています。この千利休の「遺偈」と高山右近が細川忠興に宛てた「書状」は、文章は違うんだけども言っていることは同じなのです。この二つの書状の共通点は何かということ、千利休は「切腹して死んじまえ」と言われたときに、家族のこととか、弟子たちのこととか、道具のこととかを一切切を抛(なげう)っているのです。手に握っていたものを全て手放しているのです。高山右近も「是は南海に赴き命を天に懸け」と綴り、「命を天に任せる」と言っています。師と弟子が、まさに死のうとしていいるときに、握りしめると惨めではないじゃないですか。そうではなく、同じ思いで自分の命を差し出しているのです。二人とも、自分の手には何も無い、「無」なんです。ここで共通していることは、死の向こうに自分をまかせることのできる何かがあることを知っていたということです。千利休も抛(なげう)つところを知っていたのです。高山右近の場合はキリスト者でしたからイエス様の天に任せられたのです。

■茶の湯の修道

日本人は、「運命」という言葉が好きです。ですから「運命に任せる」でしょうか。ここで皆さんに質問しますが、「皆さんが全部を失って、健康も失って、私のように体内にガンがあるとされても、それでも安らかに、あなたの渴きをいやすことのできる人生を歩んでいますか？」って聞きたいですね。「あなたは死の備えができていますか？」この二人はできていたのです。これは千利休が発明し育てあげた「渴きをいやす「利休の茶の湯」の極意だと思います。最後に委ねる未来が見えていたのです。死んだ後にも明日が見えていたのです。イエス様のことばを最後に書きました。イエス様が十字架に張り付けられようとしている時に「ああ、こんな苦い杯飲みたくない」、でも「みこころがなりますように」と、自分の生死を委ねる言葉がここに記されているのです。千利休の侘び茶の信条とは、渴いている自分の心を素直に表現する茶人の道、茶道をぼくたちに知らしめてくれたことではないかと思っています。私の場合を言えば、死に行くことを自覚し、医師からもそういうことを言われていますが、ぼくを見ていてくれる存在を知っている、すなわち主イエス・キリストを知っている。その主イエス・キリストに愛されているという平安。これが千利休の侘び茶とピタッとくっ付いています。今朝も濃茶をいただき、薄茶をいただく時に、「千利休の侘び茶」って死に行くことの備えなんだなあ……と思いながらお茶をいただきました。お濃茶を練り、お薄茶を点てるということを毎日のように修行する、修道する中で茶人としての自分の人生が創り上げられていくのではないのでしょうか。

渴きをいやす茶の湯 [レジュメより]

結論

1. 茶の湯の稽古の修道は、自分の渴きを知る人によって継続されている
2. 茶の湯の修道は、自分の人生が満たされていないことを悟る事になる
3. 聖書のことば
 - ヨハネの福音書 4章 13. 14節
イエスは答えられた。「この水を飲む人はみな、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」
 - ルカの福音書 22章 42節
「父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように。」

今回の高橋先生の講話からは、「渴きをいやすための修道(稽古)の大切さを改めて考えさせられました。